

## 歴史教育における批判的思考力の育成

——「スペイン内戦」の解釈批判学習——

児玉 康 弘

歴史を暗記物に留めるのではなく、それによって思考力の育成をめざすべきであるとする主張がなされてから久しい。歴史それ自体をわかるための思考力育成の原理は、フェントンやオレイリーらが作成したアメリカの優れた教科書研究などにより、我が国でもその原理が抽出されるにいたっている<sup>1)</sup>。これに対応した具体的な単元開発や授業構成の事例としては、我が国でも「理論批判学習」のような優れた教育内容開発の事例も見られる<sup>2)</sup>。さらに、民主主義社会の一員として必要な歴史的思考力を歴史学習を通して育成するための原理もアメリカの歴史教育のプロジェクト等の分析を通して解明されつつある<sup>3)</sup>。しかし、そのような原理に基づいた具体的な授業開発の例は我が国では少ない。そこで、本稿ではそのような思考力を歴史に対する批判的な思考力であると仮定し、その意義について論ずるとともに、具体的授業構成案を提示することにしたい。

### I. 問題の所在

本小論の目的は、これからの社会を生きていくとともに、社会の担い手となる生徒たちにとって必要となる歴史的思考力のモデルを仮設的に設定し、そのモデルに基づいた具体的な世界史授業の単元レベルでの指導案を開発して提示することである<sup>4)</sup>。

歴史的思考力と言った場合、広義にはそれは精神の作用であるので、本質的には個人の自由な営為として他者が強制的に方向づける性質のものではない。そうではあるが、学校教育（社会科歴史、地理歴史科）は、そのような自由な営為を、民主主義社会の中で生きる本人および他者にとってより有効なものへと部分的に改造する義務を負う<sup>5)</sup>。それはなぜだろうか。

結論から言うならば、それは計算力や語学力と同じく、一つの技能として「特定の歴史解釈を主体的に批判できる歴史思考力の育成」が今日求められているからであり、それは学校の教科教育によらねば習得し難い技能であるからである。今日のように社会が多分化し、様々な価値観が併存するようになると、それに伴って歴史の解釈も様々なものが対立し、自己主張をぶつけあうようになる<sup>6)</sup>。歴史解釈は一定の価値観を背景として成り立つことが多く、対立は平行線をたどることが多い。都合のよい史実ばかりが取り上げられることが多いからである。従って、対立を不毛なものに終わらせず、互いにとってより有益なものへと昇華させていくためには、異なる歴

史解釈と歴史観を客観的に理解する力が求められる。自他の歴史解釈を正当化している論理は何なのか、それはどこまで批判に耐え弁護できるものであるのか、共通に納得できる新しい解釈はないのか等、一段高い所から冷静に分析する思考力が求められるのである。言い換えれば、特定の解釈と価値観の呪縛からいったんは自他を解放し、歴史を通じた生産的な未来志向の対話を可能にすることこそ、これからのグローバルな国際社会に求められる力ではなからうか。では、そのような「批判的な歴史思考力」はどのように捉えられ、どうすれば育成できるのだろうか。ここでは、「スペイン内戦」という歴史事象を素材として考察を進めよう。「スペイン内戦」を事例として取り上げたのは、それが、前述のように価値観や歴史観によって多様な解釈が導かれる典型的な歴史事象の一つだからである<sup>7)</sup>。

### II. 批判的な歴史的思考力のモデル

歴史の解釈を客観的・批判的に分析できる歴史的思考力とはどのようなものであろうか。ここでは、それを次の4層の段階＝レベルからなる連続的な思考の構造として暫定的なモデルを設定してみよう。

第一のレベルは、まず、解釈そのものを理解する段階である。特定の歴史事象に対して、その事象の原因や結果や本質を、ある解釈がうまく説明していることをわかる段階である。「スペイン内戦」という歴史事象の場合、例えばそれを「第二次世界大戦の前哨戦として民主主義対ファシズムの戦い」とい

う解釈で説明できることを理解する段階であると言えよう。この解釈を理解するためには、「人民戦線政府がなぜ、どのように民主主義的なのか」「反乱側のフランコがなぜ、どのようにファシストなのか」を具体的な事実に即してわかる力が必要となる。

第二のレベルは、理解できた解釈の確かさや根拠を、より多くの事実に基づいてもう一度反省的、批判的に吟味する段階である。この段階では、大抵の場合、一つの解釈では説明のできない事実に出会い、解釈の限界を認識することになる。歴史＝人間社会というものは、知れば知るほど「そんなに簡単にわかられてたまるものか」と叫んでいる。例えば、「民主主義対ファシズムの戦い」という解釈では、「スペイン内戦の初期にフランコ将軍が共和国の旗を掲げ、共和国を防衛しようとしていた。」という事実は説明できない。先の解釈によれば、フランコはファシストであり、共和国を打倒しようとしたはずだからである。説明できない事実を説明するためには、別の解釈が必要となる。要するに、この段階では、解釈は真理ではなく、取り上げられる事実が異なれば、異なる解釈が成り立つことを気づかせる段階である。

第三のレベルは、解釈に作用している歴史観や価値観に気づく段階である。スペイン内戦の初期に、フランコが共和国の旗を掲げたのは、「合法的な共和国が、当時スペインの最大勢力の数百万人にもものぼる無政府主義者＝アナキストの（非合法的な）革命で事実上、崩壊していたから」である。フランコは、「革命のアナーキーな状態に対して、共和国を防衛しようとした純粋で無骨なただの軍人」としても解釈できる。なぜなら、19世紀以来、政情の不安定な時期には、スペインの軍人たちはしばしば政治に介入してきた歴史があるからである。それらはファシズムとは解釈されず、「プロヌンシアミエント（直訳するとクーデタの宣言だが、非常時の軍政とでも解釈するとわかりやすい）」という概念で捉えられている。このような解釈は、フランコに対する戦いに民主主義の大義を見出したい人々（ヘミングウェイなどの国際義勇軍を賛美する人々）にとっては、彼の歴史観や価値観にそぐわなくなる。フランコをファシストから一段引き下げて、ただの軍人と見ることは、人生を賭けてまで戦うべき敵としての価値を減ずるからである。逆に、1975年まで続いたフランコ体制を支持する人々にとっては、自分たちの主張（＝価値観）に適した解釈として、大きく取り上げたいものとなる。このように第三のレベルは、解釈や選択された事実が、どのような価値観に結び

つきやすいのか、解釈と価値観の関係を分析できる思考力の段階である。

第四のレベルは、最初の解釈と、次段階で得られた新しい解釈を比較検討する段階である。この段階では、根拠となる事実の正しさの程度やその量により解釈の優劣が決まることもあれば、解釈が物事の別々の側面を説明していることに気が付く場合もある。いずれにせよ、学習者の歴史認識は客観性、広がり、豊かさ、正確さを増していこう。最も望ましいのは、諸解釈が止揚されて、より説明力の高い科学的な理論へと発展させられる場合である。スペイン内戦について言えば、政治学などの社会諸科学の研究によって、フランコ体制をファシズムと解釈することは修正されている。ファン＝リンスらの研究によればそれは「権威主義的体制」として理論化されている<sup>8)</sup>。この理論はやや難解な面があるが、類似の理論として「開発独裁体制」の理論があり、これだと応用力があるので学習者にとって、より歴史をわかる力となる<sup>9)</sup>。20世紀前半のスペインは、カシケと呼ばれる大地主や教会が全国の土地の大部分を支配する後進的な農業国家であった。30年間のフランコ体制の歴史的意義は、「ラディカルな社会主義運動とそれに対する反発、バスク、カタロニアなどの地方分離運動とそれに対する反発などによる国家分解の危機に対して、強権的に国内統合を維持し、外国資本を導入して工業化を促進すること」に求められるのではないかと、という見方・考え方でスペイン現代史を捉える力である。これはラテン・アメリカや東南アジア諸国、韓国の盧泰愚政権までの軍事体制、広くは明治維新体制やスターリン体制まで射程に入れて20世紀の独裁の歴史的意義を考察する力となる。

では、このような歴史認識は何の役にたつのだろうか。例えば、「独裁」を悪と決めつければ、「スペイン内戦」のように支持者と支持しない人との殺し合いになる。しかし、もし社会を構成する人間一人一人が、「独裁」の機能が「開発」や「国内統合」あるいは「富の再配分」等のよりよい社会建設のためであることもあり得るといふ共通認識を持つならば、暴力的な「独裁」によらず対話と合意に基礎づけられた強力な「リーダーシップ」の形成によって、課題を解決していこうとする民主主義的な国家意志が生み出されていくのではなからうか。

以上の考察に基づいて、「批判的な歴史的思考力のモデル」を暫定的に設定すると、次の表のようになる。

<表1 歴史的思考力の構造>

<p>レベル1 事実的思考＝解釈を理解する思考</p> <p>①歴史的事実なぜ起きたのか？（原因、条件、目的、理由についての思考） 歴史的事実どのように起きたのか、その後どうなったのか？（結果、影響、機能、意義、方策についての思考） 歴史的事実の意味、本質は何か？（個性、本質、歴史的意義についての思考）</p>	<p>レベル4 理論的思考</p> <p>⑧複数の解釈の比較検討によって、どのように新しい解釈を形成することができるか？ ⑨新しい解釈の説明力は、どれほどあるのか？他地域や異なる時代の事実にも有効か？</p>
<p>レベル2 反省的思考＝解釈を批判的に吟味する思考</p> <p>②解釈を根拠づけている歴史的事実何か？解釈の証明に事実的根拠は十分か？（歴史の解釈（理論）と事実は相対的に二層に分離され、前者は後者を説明し、後者は前者を根拠ける補完関係にあることの認識） ③解釈はどれほど有効なのか、その他の歴史的事実やその後の展開の説明ができるのか？（ある解釈（理論）には説明力に限界があることの認識） ④解釈によって説明できないという理由で軽視されたり、取り上げられない事実はないか？（ある解釈（理論）だけに依拠すると、包摂されない事実は捨象されることの認識） ⑤別の解釈は成り立たないのか？成り立つとすればどちらが有効なのか？（ある解釈（理論）にとって反証材料となる事実は、別の解釈を構成する材料となることの認識）</p>	
<p>レベル3 価値分析的思考</p> <p>⑥解釈を構成した人の問題関心は何か？彼を取り巻く社会状況はどうなっているのか？それらと解釈との関係はどうなっているのか？ ⑦なぜ、どのように、時代や問題関心の変化と共に解釈と取り上げられる事実は変化していくのか？</p>	<p>（レベル5）理論反省的思考 研究の社会的意義についての思考</p>

### III. 批判的な歴史的思考力の育成原理

上に示した表1は、一般的な歴史的思考力のモデルであるので、示された力を学習者に獲得させるためには、彼自身が、具体的な歴史を通してそのような思考を体験していかなければならない。そのような思考過程を授業過程として構成するためには、前

提として思考の対象となる歴史の知識内容が構造化されていなければならない。そこで、事例として取り上げた「スペイン内戦」について、教育的に加工された思考と知識の構造を以下に示そう。なお、次表の各レベルおよび①～⑨は、すべて表1のそれと対応している。

<表2 「スペイン内戦」(事例)における思考と知識の構造>

<p>レベル1 事実的思考</p> <p>①スペイン内戦（1936-39）とは何だったのか？ 「マドリード市民らの支援する人民戦線政府を、ナチス＝ドイツやファシスト＝イタリアの支援するフランコの反乱軍が倒そうとした」という歴史的事実から、それは「民主主義対ファシズムの戦いであった」と解釈することができる。</p>
<p>レベル2 反省的＝解釈批判的思考</p> <p>②「スペイン内戦」を「民主主義対ファシズムの戦いであった」とする解釈は、他にどのような事実で根拠づけられるのか？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・アサーニャを大統領とする人民戦線政府は議会制民主主義のルール（選挙）によって、1936年にスペインに成立した合法的政権であった。</li> <li>・人民戦線政府を守ることが民主主義の大義を守ることであると信ずる多くの義勇兵がスペインに赴いてフランコ軍と戦った。</li> <li>・人民戦線政府に対する軍事的反乱を起こしたフランコ側には、スペインのファシズム政党と目されているファランヘ党が加担した。</li> <li>・ナチス＝ドイツは空爆の効果を試すためにゲルニカを無差別爆撃した。</li> </ul> <p>③「スペイン内戦」は「民主主義対ファシズムの戦いであった」とする解釈では、説明の難しい事実は存在しないか？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・内戦下でスペインの労働者と農民は、議会制「民主主義」に立脚した共和国政府を打倒する革命を起こした。共和国政府の統治能力は非合法に奪われた。アラゴンやカタロニアなどの各地で企業、土地などの生産手段は革命委員会の支配下におかれた。自営農民や中小資本家の土地や商店までも、革命委員会によって非合法かつ強制的に奪われた。</li> <li>・労働者や農民出身の民兵たちの指導者でアナキストのブエナビエンタ＝ドゥルティらは、人民戦線（共和国）政府を守るためではなく、革命を守るためにフランコと戦った。</li> <li>・フランコは決起にあたり「スペイン共和国」の国旗を掲げ、決起の理由を革命による政治権力の空白に対するため（反革命のため）とした。</li> </ul>

- ④「スペイン革命」の進展という史実はどうのように扱われてきたか？それはなぜか？  
 スペイン史に関する一般の概説書にはあまり大きく取り上げられてこなかった。高校の教科書や参考書にはまったく触れられていない。なぜならば、内戦を「民主主義対ファシズムの戦い」とする解釈では説明しにくいからである。「革命」が「民主主義」であるかどうか、「反革命」が「ファシズム」であるかどうかは、次元の違う概念であるので判断できない。
- ⑤「スペイン革命」の進展という史実に基づいて、「スペイン内戦」とは何であったのか、別の解釈は成り立たないのか？二つの解釈はどちらが正しいのか？
- 内戦の前半は、「スペイン革命」に伴う社会的混乱を、「反革命」の立場で収束させようとした一部軍人のクーデタであった。
    - ・19世紀のカリスタ戦争以来、内乱や政治的混乱の続いたスペインでは、しばしば国内秩序の安定のために軍部が政治介入をした。この伝統をプロシミアミエントという。
  - 内戦の後半は、「革命を隠蔽したコミンテルン＝共産党」対「スペイン＝ナショナリズム」の戦いであった。
    - ・革命の存在は、英仏など資本主義諸国の支援を不可能にするので、英・仏を参戦させてドイツと戦わせないソヴィエト共産党は、スペイン共産党を通じて革命を阻止し、隠蔽した。
    - ・フランコ側は、国民統一と伝統的スペインへの回帰を掲げてカトリックや地主、王党派、カリリスタ、中産階級、右翼政党（CEDA）等の支持を得た。
  - スペイン内戦を「民主主義対ファシズムの戦い」と解釈すると、第二次世界大戦の前哨戦として歴史の流れがわかりやすい。しかし、フランコが大戦で中立を守ったこと、長期政権となったことは単にフランコ政権をファシズムと解釈するより、ナショナリズムを基盤としたと解釈した方が説明しやすい。

### レベル3 価値分析的思考

- ⑥なぜ、スペイン内戦を「民主主義対ファシズムの戦い」とであると解釈する人たちは、「スペイン革命」の存在やその隠蔽などに関する事実を無視しようとするのか？
- フランコ体制をファシズム的独裁体制として批判する人々には、フランコの蜂起に合理的の根拠を与える「スペイン革命」という史実は無視される。
    - ・スペイン革命の存在を実証したバーネット・ボロテンは著書の序文で、「資料を提供してくださった友人・知人の方々の政治的思いを二の次にしなければならなかったことを遺憾としなければならない」と述べている。彼の研究を高く評価したイギリスの歴史家トレヴァー＝ローパーはスペイン内戦は「国際的・イデオロギー的性格のために純粋なスペインの戦いとしての国内的な意味は当初から無視された」と論じている。
  - 冷戦の時代にアメリカ資本主義に批判的で、ソ連社会主義に期待する人々には、ソ連にとって不利となる「スペイン革命に対する弾圧と隠蔽」という史実は無視される。
    - ・ソ連共産党のクリヴィツキーは、スペインにおける共産党の活動を証言し、回顧録が日本でも出版された。その信憑性について、一橋大学教授N氏は次のように述べた。「イヌ（密偵、クリヴィツキーのこと）はしよせんイヌであり、自尊独立の市民であるわれわれは、イヌとその見解をともにするわけにはいかない。さらにそのイヌが、自分のパトロンであるアメリカのFBIの意を迎えて筆を曲げたとすれば、その資料的価値はさらに激減する。以上の理由により、評者はこの本をいわゆる「スターリン時代」の史料とすることに正面から反対である。」（1962年当時）
- ⑦社会的状況が変わると、「スペイン革命」やその隠蔽は、どのように扱われるようになったのか？
- ・フランコが死去し（1975）、冷戦が終わると（1989）、ボロテンの『スペイン革命』の翻訳書などスペイン内戦とフランコ体制について客観的に考察しようとする書物の出版が日本でも増えている。（引用・参考文献 2, 19, 20, 48, 49, 51, 52, など）

### レベル4 理論的思考

- ⑧フランコ政権とは何であったのか、という問いに対して、政治学の理論ではどのような説明をしているのだろうか？
- フランコ体制を、全体主義的独裁体制と解釈するよりも、権威主義的政治体制（J. リンス）として説明すると、多様な勢力が彼を支持したことや、フランコ死後のファン＝カルロス1世時代にスペインの民主化が急速に進展したことを説明できる。
  - フランコ体制を、後進国の近代化の過程で生じる「開発独裁」的な体制であった、と機能一構造的に解釈することも可能であり、その方が戦後のスペインの経済発展についてよりよく説明できる。
- ⑨権威主義的体制という概念は、現代史においては「フランコ体制」だけでなく、ブラジルの第一次ヴァルガス政権（1930-45）・1964年以後の軍事政権など、ラテン・アメリカの発展途上国で生じた歴史事象に対しても説明力を有する。

#### IV. 「スペイン内戦」の解釈批判学習（教授書試案）

##### ①小単元の目標

レベル1・レベル2	「スペイン内戦とは何だったのか」という問いに対して、「民主主義対ファシズムの戦い」「革命対反革命の戦い」など複数の解釈が、それぞれ異なる史実の選択によって成り立つことを理解させる。（上記の①～⑤に対応）
レベル3	「スペイン革命」の存在を取り上げようとした研究や、それを隠蔽しようとした動きが、なぜ我々に情報として提示されることが少なかったのかを考えさせる。（上記の⑥⑦に対応）
レベル4	フランコ体制の理論的な理解は、現代スペインの理解やラテンアメリカ諸国の政治体制の理解を容易にすることに気づかせる。（上記の⑧⑨に対応）

##### ②小単元の構成

第1時 レベル1	スペイン内戦とは何だったのか～「民主主義対ファシズムの国際的内戦であった」とする解釈の理解
第2時 レベル2	なぜ、ジョージ＝オーウェルは、「スペイン内戦が民主主義のための戦争である、というのは隠そうにも隠せないごまかしである」と考えたのか。＝最初の解釈の批判
第3時 レベル2	スペイン内戦とは何だったのか～フランコの戦いは、最初は革命勢力に対するものであったが、後に革命を隠蔽した共産党との戦いに転化した、という解釈の理解
第4時 レベル3	なぜ、「スペイン革命」の存在は、高校世界史では教えられてこなかったのだろうか？
第5時 レベル4	なぜ、「フランコ体制」は1975年までも続いたのか。彼の体制を単に「ファシズム体制」とであると解釈することと、「権威主義的体制」「ナショナリズム」「開発独裁体制」などの多面的な解釈でとらえることと、どちらが説明力があるか比較する。

##### ③小単元の展開案

	問	い	教授・学習活動	資料	答	え
第1時 導入	◎スペイン内戦とは何か？ ・なぜ、写真の青年は武器を手にしたのだろうか？		T：投げかける T：発問する P：考える	①	○フェデリコ・ボレル・ガルシア青年は、1936年コルドバ郊外のセロ・ムリアーノで、スペイン共和国の市民軍兵士として内戦の戦場で敵の銃弾を受け死亡した。この瞬間をカメラマンのキャバがとらえ「崩れ落ちる兵士」として発表し、スペイン内戦を世界的に有名にした。青年は何かの大義、自分が正義であると信ずるものために武器を手にとったのではない。	
展 開 1	・内戦はいつ起きたのか？		T：発問する P：調べる	②	・1936年に始まって、1939年に終わっている。	
	・誰が内戦を起こしたのか？		T：発問する P：調べる	③	・フランコ将軍が、アサーニャを首相とする人民戦線内閣に対して起こした。	
	・人民戦線とは何か？		T：発問する P：調べる	④	・ファシズムの台頭を防ぐために、ファシズムに反対する人々を結集させた政府。ソ連共産党が1935年に認めた。	
	・スペインにはファシズム勢力があったのか？		T：発問する P：調べる	⑤	・ファランヘ党というファシズム結社が結成され、1936年には2万5千人の党員を擁していた。党首のホセ・アントニオ・プリモ・デ・リベラは人民戦線内閣に処刑されたが、ファランヘ党はフランコの反乱を支持した。	
	・なぜ、フランコ将軍は政府に対して反乱を起こしたのか？		T：発問する P：考える	⑥	・ファシズムに反対する内閣に対して反乱を起こす、ということはフランコもファランヘと同様、	

	問	い	教授・学習活動	資料	答	え
展開1						スペインにファシズム体制をつくらうとしていたのではない。
展開2	・スペイン内戦はどうなったのか？		T：発問する P：調べる	⑦	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1939年3月に共和国の首都のマドリードが陥落し、フランコ將軍の勝利に終わった。</li> <li>・国内では地主・カトリック教会・王党派・軍部の一部など旧支配層を中心とした約半分の支持を固めたので。また、対外的には、ドイツ、イタリア、ポルトガルの援助を受けることができたので。またフランコの戦術には失敗もあったが、支配領域＝面を獲得・支配していく戦略が結果的には成功した。</li> <li>・人民戦線内閣（共和国）は、農地改革をめぐらしたために大土地所有者の反発をかき、カトリック教会のもっていた教育・結婚などに関する権限を奪って（政教分離政策）僧侶たちの反発をかき、軍制改革で王党派の軍人を1万人以上解雇したために彼らの反発をかかった。</li> <li>・見返りとして、将来の自分たちの戦争に協力させるためではないか。また、ゲルニカへの空爆をはじめとして、きたるべき戦争に備えて新兵器のテストをするためだった、という説もある。</li> <li>・人民戦線内閣を支援したのは多様な人々であり、途中で内部対立が起きたから。英、仏が不干渉政策をとって援助しなかったから。</li> <li>・ソ連からの武器援助と軍事顧問の派遣、および全世界からの約4～6万名もの義勇兵に支えられて抗戦したので。ドロレス＝イバルリの「ノーパサラン（奴らを通すな）」を合い言葉としたマドリード市民と義勇兵は、勇敢に抗戦した。</li> <li>・1936年のオリンピックはファシズムの牙城ベルリンで開催されたが、これに対抗するバルセロナ＝オリンピックが計画されていた。ベルリン＝オリンピックをボイコットした各国選手4000人はフランコの蜂起をファシズム勢力の蜂起と考えて最初の義勇兵となった。日系といわれるジャック白井も、フランコをファシズムととらえて、これと戦うためにリンカン大隊に加わった。</li> </ul>	
	・なぜ、フランコ將軍は勝つことができたのか？		T：発問する P：考える	⑧		
	・なぜ、地主・教会・軍部はフランコを支持したのか？（共和国に対する反乱を支持したのか？）		T：発問する P：考える	⑨		
	・なぜ、ドイツとイタリアはフランコを支援したのか？		T：発問する P：考える	⑩		
	・なぜ、人民戦線内閣は敗北したのか？		T：発問する P：考える	⑪		
	・それにもかかわらず、なぜ人民戦線内閣は3年間もフランコに対してもちこたえることができたのだろうか？		T：発問する P：考える	⑫		
・なぜ、大勢の義勇兵はフランコと戦おうと考えたのか？		T：発問する P：考える	⑬			
第1時 終結	○なぜ、冒頭の写真の青年は武器をとったのか？ ◎スペイン内戦とは何であったのか？		T：発問する P：考える	⑭	○フランコをファシズムととらえて、民主主義を守ろうとして戦ったのではないか ◎フランコ側＝ファシズムと人民戦線内閣側＝民主主義勢力が戦った国際的な内戦と考えられる。それは第二次世界大戦と類似の構図であり、スペイン内戦は前哨戦だととらえられる。英・仏が不干渉政策ではなく、断固としてドイツ・イタリアの介入を阻止していたならば、第二次世界大戦はすぐに始まらなかったのではないかと、という考え方もある。	
第2時 導入	◎なぜ、ジョージ＝オーウェルは、スペイン内戦をファシズム対民主主義の戦いであると考えなかったのか？		T：投げかける	①	・スペイン内戦に義勇兵として参加したジョージ＝オーウェルは、著書「カタロニア讃歌」で「この戦争が民主主義のためのものだというのは、隠そうにも隠しようのないごまかしだ」と述べている。	

	問	い	教授・学習活動	資料	答	え
展 開 1	○ジョージ=オーウェルはスペインでどのような体験をしたのか？		T：発問する P：調べる	②		・POUM（マルクス主義統一労働者同盟）参加の義勇兵として、アラゴン戦線でフランコ軍と戦い、その後1937年5月の「バルセロナ事件」を目撃した。
	・POUMとはどのような結社なのか？		T：発問する P：調べる	③		・1935年にアンドレス・ニンを指導者として結成されたの革命政党。党員は約7000人。ソ連を批判し、コミンテルンに加盟しなかった。
	・なぜ、POUMは、ソ連を批判したのか？		T：発問する P：調べる	④		・当時、ソ連のスターリンは、モスクワ裁判とよばれる裁判で政敵の粛正を開始しており、独裁体制を強めていた。ニンらはこれを批判した。
	・POUMの批判に対して、ソ連はどのような対応をしたのか？		T：発問する P：考える	⑤		・「バルセロナ事件」の責任を、一方的にPOUMに帰せしめた。ニンは捕らえられて、密かに殺害されたといわれる。
展 開 2	・「バルセロナ事件」とはどのような事件なのか？		T：発問する P：調べる	⑥		・「内戦中の内戦」といわれる共和国陣営での内戦。反フランコ側の重要拠点であるカタロニアのバルセロナで起きた。戦ったのは、PSUC（カタロニア統一社会党）に対してFAI（イベリア・アナキスト連盟= CNT（全国労働連盟）およびPOUMの連合軍である。
	・PSUCとは何か？		T：発問する P：調べる	⑦		・ソ連共産党の指導下にあるスペイン共産党を指導勢力とするカタロニアの社会主義政党。
	・FAIとCNTとは何か？		T：発問する P：調べる	⑧		・スペイン最大勢力の無政府主義者の政党と労働組合。無政府主義とは、マルクスを批判したバクスターニンに始まる思想で、中央集権的な国家権力を否定し、地方で労働者が政治や経済を自主的に運営することをめざしていた。
	・なぜ、「バルセロナ事件」は起きたのか？		T：発問する P：調べる	⑨		・PSUC（共産党側）の主張 カタロニアを実質的に支配しているアナキストたちはけしからん。フランコに勝つためには、革命をやっている場合ではないし、中央集権化も必要だ。彼らの手から電話局などの機関を取り戻さなければならない。 ・アナキストとPOUM側の主張 我々は革命のために戦っている。自らの自由と解放を勝ち取るための戦いとフランコとの戦いは不可分である。PSUCは、結局、ソ連の言いなりであって、彼らの言い分を認めることは、ソ連のスペイン支配を認めることになる。
	・「バルセロナ事件」はどうなったのか？		T：発問する P：調べる	⑩		・両派の銃撃戦で数百名の死者を出したが事実上、PSUC（共産党）側の勝利に終わった。アナキストの幹部が、フランコとの戦いを優先させる決断をしたからである。この決断は、革命のために戦っている民兵の志気をそいだ。共産党は事件の責任をPOUMに押しつけ（フランコのスパイ、トロツキストのレッテルを張った）、ニンを拉致し殺害した。
終 結	◎なぜ、ジョージ=オーウェルは、スペイン内戦をファシズム対民主主義の戦いであると考えなかったのか？		T：発問する P：考える			◎反フランコ陣営の人々が、民主主義のためではなく、それぞれの党派の目的や利害のために戦っており、互いに激しく対立していることを認識したので。

	問	い	教授・学習活動	資料	答	え	
第3時導入	◎	スペイン内戦とは何か？ ・最初に見た写真のガルシア青年がアナキストだとしたら彼は何のために戦っているのだろうか？	T：投げかける T：発問する P：考える	①		・革命のために戦っているのではないか。	
展 開  1	○	スペイン革命とは何か？  ・それではなくて、スペイン内戦期のスペイン革命とは何か？  ・なぜ、労働者は共和国を倒そうとしたのか？  ・なぜ、農民は共和国を倒そうとしたのか？  ・1936年のスペイン革命下で、労働者や農民はどのような社会を建設したのか？ ・これらの政策は、スペイン共和国の体制とは根本的にどこが違うのか？	T：発問する P：調べる T：発問する P：調べる  T：発問する P：調べる  T：発問する P：調べる  T：発問する P：調べる  T：発問する P：考える	② ③ ④		・1931年にブ（ポ）ルボン王朝が倒れて、スペイン共和国が成立した出来事。 ・スペイン共和国を打ち壊して、労働者と農民が工場、鉱山、農地などの生産手段を共有化しようとした出来事。 ・マドリード、バルセロナ、北部の鉱山地帯（アストゥリアス）などでは、多くの労働者が劣悪な労働条件と酷しい生活条件に苦しんでいた。彼らは、社会党系のUGTという労働組合と、アナキスト系のCNTという労働組合に組織されるようになっていた。1931年から33年までの共和国は左派連合政権で労働問題の改革に取り組んだが、不徹底であった。33年から35年までの右派政権では、労働政策は後退した。これに失望した労働者たちは1934年にアストゥリアスなどで蜂起したが、共和国政府はこれを残酷に弾圧した。労働者は共和国（議会制民主主義）に不信感をもち、その政策に頼らずに工場や鉱山を自主管理しようとした。	
	○	スペイン革命とは何か？	T：発問する P：考える	⑤		・スペイン農業は、250ヘクタール以上の「大規模所有地」を有するカシケに支配されていた。零細農と農業労働者たちは、共和国政府に土地改革を期待していた。農地改革をめざした、共和国政府内部では、貧しい農民の土地私有を増やすのか、国有化し集産化とするのかを巡って意見が対立していた。結局、前者の方向で南部の土地を買い上げ農民に分配したが、予定の20%しかできずに不徹底に終わった。多くの農民は、これに不満を持ち、CNTやUGTの指導で自主的に集産化された農場を作ろうとした。	
	○	共和国に権力がないとしたらフランコの戦う相手は、何になるのか？	T：発問する P：考える	⑥		・貨幣と階級のない平等な社会、生産手段を共有化して、各人が能力に応じて働き必要に応じて得ることのできる社会を建設した。	
	○	共和国を支援したソ連は、スペインの革命に対して、どうしたのか？  ・本当に支持したのか？	T：発問する P：予想する  P：調べる	⑦ ⑩		・共和国では私有財産制度や商取引の自由や生産の自由、蓄財の自由が認められてた。それらの自由を保障する体制として警察や軍隊や裁判所が組織されていた。中産階級は、「巨大な社会革命」にとまどいながら、内心は反対であった。 ・1936年にスペイン共和国を解体させた労働者や農民の自由（無政府）共産主義革命である。 ・実質的にスペイン各地を支配している革命勢力ということになる。	
	展 開 2	○	共和国を支援したソ連は、スペインの革命に対して、どうしたのか？  ・本当に支持したのか？	T：発問する P：予想する  P：調べる	⑨		・ソ連も社会主義国家であり、5か年計画で農業の集団化をしていたのだから、支持したのではないか。 ・ソ連共産党は、コミンテルンとスペイン共産党を使って、スペイン革命を阻止し諸外国の目に革命がふれないように隠蔽しようとした。



	問	い	教授・学習活動	資料	答	え
展 開 2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どのように阻止し隠蔽したのか？</li> <li>○なぜ、ソ連はスペイン革命を阻止し隠蔽したのか？</li> <li>・なぜ、スターリンは、そこまでして英仏の参戦を望んだのか？</li> <li>○ソ連が革命を阻止し隠蔽したことは、スペイン内戦にどのような影響を与えたのか？</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>T：発問する</li> <li>P：考える</li> <li>T：発問する</li> <li>P：考える</li> <li>T：発問する</li> <li>P：考える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>⑪</li> <li>⑫</li> <li>⑬</li> <li>⑭</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・武器援助、陰謀、テロル等のあらゆる手段を用いた。</li> <li>・ソ連のスターリンにとって、革命の存在が明るみにでると、英・仏などの資本主義国が人民戦線政府を援助しなくなると考えた。</li> <li>・ヒトラーのドイツを怖れていた。英・仏と戦わせようとした。本当は、スペインでのソ連の力を示してヒトラーに自分の力を認めさせ、直接不可侵条約を結ぶためだった、とする説もある。</li> <li>・共和国陣営は政治的にも軍事的にも共産党に支配され、この結果、革命をめざした民衆の士気が低下した。フランコ側は「反革命」という目的を維持できなくなったので、フランコを総統として伝統的な強いスペインへの回帰のための戦いという戦争目的を打ち出した。</li> </ul>	
第 3 時 終 結	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎スペイン内戦とは何か？</li> <li>・最初に見た写真のガルシア青年がアナーキストだとしたら彼は何のために戦っているのだろうか？</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>T：発問する</li> <li>P：考える</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>◎内戦の前半は「革命対反革命の戦い」とであると解釈できる。つまり、貧しい農民や労働者が、土地と工場経営を求めてスペイン各地を支配したのに対して、軍部がそれに伴う混乱を阻止するために革命をやめさせようと介入した。内戦の後半は「革命を隠蔽した共産党対保守的な勢力を結集して統一スペインを回復しようとしたフランコの戦い」として解釈できるのではないか。</li> </ul>	
第 4 時 導 入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1936年のスペイン革命について記述のある世界史の教科書はいくつあるだろうか。</li> <li>◎なぜ、世界史の教科書には、スペイン革命の記述はないのだろうか？</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>T：発問する</li> <li>P：調べる</li> <li>T：発問する</li> <li>P：予想する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・18の教科書での頻度を示している山川出版社の『世界史B用語集』では、一つも取り上げられていないことになっている。</li> <li>(自由に予想する)</li> </ul>	
展 開 1	<ul style="list-style-type: none"> <li>○歴史の教科書の記述は、何に基づいて書かれているのか？</li> <li>・スペイン革命は、歴史学の世界では認められていない史実なのだろうか？</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>T：発問する</li> <li>P：調べる</li> <li>T：発問する</li> <li>P：調べる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>②</li> <li>③</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・枠組みは学習指導要領だが、内容的には歴史学の研究成果に基づいて書かれている。</li> <li>・1961年、バーネット・ボロテンというスペイン内戦の研究者が発表した『大いなる隠蔽』という歴史書は、スペイン革命の存在を実証して、英米の歴史家や研究者からは高い評価を受けた。しかし、実はこの本は1952年にはすでに完成していた。出版社に嫌われたので発刊が遅れたのである。オーウェルの『カタロニア讃歌』も同様に扱われて、スペイン革命が存在したことについての知識は、なかなか広まらなかった。</li> </ul>	
展 開 2	<ul style="list-style-type: none"> <li>○なぜ、ボロテンやオーウェルの本を嫌う（無視する）人々がたくさんいたのだろうか？</li> <li>・たとえば、ボロテンは、何に基づいてスペイン革命の存在を実証したのか？</li> <li>・クリヴィツキーとは何者か？</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>T：発問する</li> <li>P：考える</li> <li>T：発問する</li> <li>P：調べる</li> <li>T：発問する</li> <li>P：調べる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>④</li> <li>⑤</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ボロテンの研究成果を信用していなかったのではないか？</li> <li>・当時のスペインの新聞、パンフレット、ビラ、政府刊行物、関係者へのインタビューなど莫大な史料に基づいている。その中で、彼はクリヴィツキーという人物の証言にたびたび触れている。</li> <li>・本名をサムエル・ギンスベルクという。ソ連秘密警察の元ハーグ駐在諜報機関長（スパイの長）であった。スターリン体制に幻滅してアメリカに亡命した。</li> </ul>	

	問	い	教授・学習活動	資料	答	え
展 開	2	・クリヴィツキーは、どのような証言をしたのか？	T：発問する P：調べる	⑥	・スペイン内戦に対するスターリンの関与について証言した。革命を阻止・隠蔽し共和国を支配しようとしたことが赤裸々に述べられている。この証言は、書物となり日本でも出版された。	
		・日本の研究者は、クリヴィツキーの証言をどのように受け止めたか？	T：発問する P：調べる	⑦	・一橋大学教授のN氏は、1962年当時、次のように書評で述べた。「この本は……アメリカの指導層の要求に余りにも合致しすぎている。彼が事実をありのままに書いたとしても、イヌ（密偵）はしょせんイヌであり、自尊独立の市民であるわれわれは、イヌとその見解をとにもするわけにはいかない。……」	
		・なぜ、N氏は、事実であるとしてもクリヴィツキーの見解を受け入れない、と言っているのだろうか？	T：発問する P：考える		・アメリカに都合のよい事実が嫌いだからではないのか？	
		・なぜ、クリヴィツキーの証言はアメリカに都合がよいのか？	T：発問する P：考える	⑧	・冷戦期の米ソの対立の中で、ソ連がスペインで犯罪的行為を侵していたことがわかれば非難できるので。	
		・なぜ、N氏はアメリカに都合のよい証言が嫌い、ソ連をかばおうとしたのか？	T：発問する P：考える	⑨	・ソ連は、本当に共和国のために民主主義勢力を結集させたのだと信じているのではないか。フランコと戦うためには、革命で共和国側がバラバラになっては勝てない、と考えたから革命を潰したのであって、正しいことをしたのだと信じているからではないか。	
		・他に、革命の存在やソ連の支配などの事実が明るみに出た方が都合のよい人はいないだろうか？	T：発問する P：考える	⑩	・フランコ	
		・なぜ、フランコにとって都合がよいのか？	T：発問する P：考える	⑪	・民主主義勢力と戦ったのではなくて、非合法的な革命勢力や、全体主義的共産党支配と戦ったのだ、と自らを正当化できるので。	
・フランコをファシズムと考えて嫌う人々にはとっては、革命の存在や共産党の支配についての史実や解釈は、どのように思えるか？	T：発問する P：考える	⑫	・フランコに都合のよいことは、あまり知りたくないし、多くの人に知られたくもない、と考えるのではないか。			
	○なぜ、ポロテンやオーウェルの本を嫌う（無視する）人々がたくさんいたのだろうか？	T：発問する P：考える T：まとめる		○ソ連の政策が民主主義を守るためであった、と信用していた人々が多かった時代には、ソ連に都合の悪い革命の存在を論証するような研究は軽視されていた。フランコ体制が存続していた時代には、フランコを独裁者として嫌う人々にとって、フランコに有利となる革命の存在は軽視（無視）されていた。		
展 開	3	○フランコ体制が1975年に終結し、ソ連が1991年に消滅するとスペイン革命の扱いはどうなっただろうか？	T：発問する P：考える	⑬	○現実にフランコに有利になったり、ソ連に不利になったりしなくなるので、客観的に取り上げられ、考察されるようになるのではないか。事実、ポロテンの本は1991年に日本で訳書が出版され、その後も1993年にヴィラルルの「スペイン内戦」、1998年には日本の研究者たちによる新しい概説書『スペインの歴史』などでスペイン革命は重要な史実として取り上げられている。	
終 結		◎なぜ、世界史の教科書には、スペイン革命の記述はないのだろうか？	T：発問する P：考える		◎現代世界の政治的利害関係の中で、史実や解釈を越えた価値判断が作用して、軽視されていた。しかし、今後、世界史の教科書に取り上げられるかもしれない。	

	問	い	教授・学習活動	資料	答	え
第5時導入	◎なぜ、フランコ体制は1975年までも続いたのか？ (フランコ政権をファシズム政権とする解釈と、そうでない別の政治体制であると解釈することのどちらが、1975年までの長期間、彼の体制が続いたことをよりよく説明できるだろうか？)		T：投げかける	①	・1975年11月20日、約40年にわたる二十世紀最長の独裁政権維持記録を打ち立てて、フランコは83才で死んだ。	
展 開 1	○20世紀のファシズム諸国はどうなったのか？		T：発問する P：考える	②	・ドイツ、イタリア、日本の三ヶ国は、いずれも第二次世界大戦で、ファシズムに対する民主主義を標榜する連合国に敗北していった。	
	○スペインは、第二次世界大戦でどのような態度をとったのか？		T：発問する P：調べる	③	・おおむね中立を保った。(ドイツの艦船に補給をしたり、独ソ戦に際して青師団を派遣したりはした。)	
	・なぜ、スペインは中立を保ったのか？ドイツやイタリアは内戦援助の見返りとして参戦を求めなかったのか？		T：発問する P：調べる	④	・1940年のエンダヤ会談で、ヒトラーはフランコに参戦を求めたが、フランコが参戦の見返りに多くの植民地を要求する戦術を利用して巧みに参戦を拒んだ、とされてきた。しかし、実際にはヒトラーがスペインの直接の参戦を望まなかったらしい。	
	・なぜ、ヒトラーはスペインの参戦を望まなかったのか？		T：発問する P：調べる	⑤	・フランコ政権は、ナチス＝ドイツのような強力な国家ではないので足手まといになると考えていたらしい。	
展 開 2	○なぜ、ヒトラーは、自らの体制よりもフランコ体制を脆弱であると考えたのだろうか？ ・ヒトラーのナチス＝ドイツ体制の特色はどのようなものであったのか？		T：発問する P：調べる	⑥	・内戦の後遺症が大きいと考えたからであるが、もっと基本的に体制の違いが考えられるのではない。 ・ナチス＝ドイツは、①一党独裁であり、②徴兵制度や歓喜力行団、ヒトラー・ユーゲント、親衛隊などの諸制度を通じて政治的な動員力が強大であり、③指導理念が明確(ヴェルサイユ体制の打破、東方生存権の獲得、新しいドイツ人の創造など)であり、④全ドイツ人がヒトラー個人に忠誠を誓う形で権力を集中させた。	
	・ナチスと比較した場合、フランコの政治体制の特色は、どのようなものであったのか？		T：発問する P：調べる	⑦	・フランコの政治体制は、①多元主義的であり(カトリック教会、経済団体、文化団体、軍隊等の複数の政治集団がその存在を許されており、ファランヘ党員の閣僚構成も25%程度であった)、②労働組合や学生などに対する規制力、動員力は弱く、③指導理念と言えるほどのものはなく、せいぜいエル・シッドやコロンブスなどの過去の栄光を国民統合に利用しようとする心情的なものであり、④フランコの閣議における役割は、多様な勢力を代表する人々の意見の調停者であった。	
展 開 3	○フランコ体制と似たような政権は他にないだろうか？		T：発問する P：調べる	⑧	・1930-45年のブラジルのヴァルガス政権や1964-86年に存続した軍事政権と類似しているといわれている。	
	・類似点は何か？		T：発問する P：調べる	⑨	・民主主義的ではないが、ファシズム体制のように大衆動員に訴えることも、単一政党が国民生活に干渉することもないため、全体主義と区別して権威主義的体制とよばれることがある。	
	・権威主義的体制は、なぜ長く		T：発問する	⑩	・労働運動や農民運動は力で押さえるが、文民の	

	問	い	教授・学習活動	資料	答	え
展 開 3	続くことに成功したのか？		P：調べる			テクノクラート（経済や科学技術の専門家）を登用して（スペインの場合はオプス＝デイ（神の御業）とよばれるカトリック教徒のエリート）、工業の高度化政策を成功させ、国民経済を豊かにすることに一定の成功を収めたので。
終  結	◎フランコ政権をファシズム政権とする解釈と、そうでない別の政治体制であると解釈することのどちらが、1975年までの長期間、彼の体制が続いたことをよりよく説明できるだろうか？ ◎そのことは、スペイン内戦を「ファシズム対民主主義の戦い」としてのみ解釈することと、どのような関係があると思うか？		T：発問する P：考える  T：発問する P：考える		◎ファシズム体制と決めつけてしまうよりも、独裁的ではあるが、異なる権威主義体制として解釈した方が、比較多数の国民の支持を得ていたことの説明が可能である。  ◎スペイン内戦を「ファシズム対民主主義の戦い」と解釈することは、当時の世界史の理解の上で有益である。しかし、それだけの視点では、フランコをファシストとしてのみ解釈することになり、今度は現代世界の理解に困難をきたしてしまうことになる。歴史の多様な解釈を比較して、多面的・重層的に認識することが必要ではないか。	

<教授資(史)料> (紙数の関係で資料名と出典のみ記載)

☆第1時

① 武器をとる青年の写真

ロバート・キャパ「崩れ落ちる兵士」(フェデリコ・ボレル・ガルシア青年) セロ・ムリアーノ近郊 コルドバ前線、スペイン1936年9月5日

②③ フランコ将軍の反乱 『詳説 世界史』山川出版, 1999年, pp.310-311

④ 人民戦線 同上書, p.305

⑤ ファランヘ党 『詳解 世界史用語事典』三省堂, 1996年, p.358

⑥ フランコ 水村光男『世界史のための人名辞典』山川出版社, 1991年, pp.262-263

⑦ ②③および⑥再掲

⑧ フランコの支持勢力 青木裕司『青木世界史B 講義の実況中継④』語学春秋社, 1997年, pp.84-85

⑨ フランコ支持の背景 引用・参考文献19 pp.199-201より

⑩ ドイツとイタリアのフランコ支援 青木, 前掲書, pp.85-86

⑪ 人民戦線側の敗北 青木, 前掲書, pp.85-86

⑫ ソ連の人民戦線支援, マドリード市民の奮闘 文献19, pp.203-204

⑬ 義勇兵の参加 文献38, pp.133-135 および文献38, pp.135-139

⑭ スペイン内戦の歴史的解釈 吉岡力『総合力完成 世界史』旺文社, 1983年, p.422

☆第2時

① ジョージ＝オーウエルの解釈 文献11, pp.186-187

② ジョージ＝オーウエル 文献11, pp.349-351より一部修正して作成

③ マルクス主義統一労働者党(P O U M) 文献17, p.119を加工・修正

④ P O U Mのソ連批判 文献5, pp.412-414より

⑤ ソ連のP O U M攻撃 文献48, p.150

⑥ バルセロナ事件 文献48, p.149

⑦ カタロニア統一社会党(P S U C) 文献5, p.32

⑧ C N T (全国労働連合, アナルコサンディカリスト系の全国労働組織)

F A I (イベリア・アナキスト連盟, C N T内部のアナキスト組織)

文献12, pp.17-20 文献25, pp.252-254 文献13, pp.166-167 文献14, p.110より作成

<スペインの主な左派の政治勢力> (筆者作成)

	アナーキスト	社会民主主義	反ソ共産主義	親ソ共産主義
組織・政党	CNT (全国労働連合) FAI (イベリア・アナ キスト連盟)	UGT (労働者総連合) PSOE (スペイン社会党)	POUM (マルクス主 義統一社会党)	PSUC (カタロニア 統一社会党) 共産党
主義・主張	国家や政府の否定 労働者や農民の自主管 理	右派は、社会改良主 義・修正主義 左派は、プロレタリア 革命をめざす。	スターリンの独裁政治を 批判し、本来のマルクス 主義を掲げるカタロニ アを拠点とした政党。	コミンテルンに加盟し、 ソ連の指導下にある。
革命への姿勢	無政府集産革命推進の 主体	UGTの組合員らは革 命に参加	アナーキストと共同歩 調	革命の阻止と隠蔽に務 める
指導者	ブエナビントウラ=ドゥ ルティ ガリシア・オリベル 他	右派： インダレシオ・プリエト 左派： ラルゴ・カバリェロ	アンドウレウ・ニン	ホセ=ディアス ドロレス=イバルリ
勢 力	160~200万人	150万人	約7000人	最初は微小勢力であっ たが、革命の否定によ り中産階級の支持を得 て党勢を拡大した。

- ⑨ バルセロナ事件の背景 文献11, pp.284-288より, および文献15, pp.187-188  
⑩ バルセロナ事件の結果 文献11, pp.288-289より

☆第3時

- ① 「崩れ落ちる兵士」 (第1時①再掲)  
② 教科書のスペイン革命 『世界史B用語集』山川出版社, 1998年, p.260  
③ 隠されたスペイン革命 文献5, pp.87-94より  
④-1 スペインの都市・工業・労働者問題 文献20, pp.17-19より  
④-2 改革の2年間 (共和国31-33年) への労働者の不満 文献2, pp.76-77  
④-3 暗黒の2年間 (共和国33-35) の労働運動の弾圧 文献2, pp.87-91より  
⑤-1 スペインの農業問題 文献2, p.28 および p.73より  
⑤-2 共和国の不徹底な農地改革 文献19, pp.200-202  
⑥ 貨幣と階級のない社会 文献5, pp.103-105  
⑦ 中産階級にとってのスペイン革命 文献5, pp.119  
⑧ フランコの戦う相手は誰なのか? 文献48, pp.92-94  
⑨ ソ連と革命 『詳説 世界史』山川出版, 1999年, p.294  
⑩-1 ある外国人の見聞 文献43, pp.64-65  
⑩-2 コミンテルン所属のフランス共産党の声明 文献5, p.146  
⑩-3 ある歴史家の説明 文献5, pp.25-26  
⑪-1 集産体への攻撃 文献5, p.495  
⑪-2 テロル 文献46, pp.68-69  
⑫ 資本主義国イギリス・フランスは革命勢力を支援しない 文献5, p.203  
⑬-1 スターリンは英・仏の参戦 (独・伊との死闘) を望む 文献22, p.256  
⑬-2 スターリンはドイツを恐れる 文献46, p.10 p.83などより  
⑭-1 フランコと戦う兵士の士気の低下 文献5, p.505  
⑭-2 フランコの戦争目的の変化 文献48, p.110

☆第4時

- ① 省略  
② 教科書記述の根拠 尾鍋輝彦, 豊田武, 平田嘉三編 『歴史教育学事典』, ぎょうせい, 1980年, p.17  
③-1 スペイン革命の研究とその無視 文献5, p.10  
③-2 共産党の役割とその無視 文献5, p.622  
④ スペイン革命の存在の証拠 文献5, pp.623, p.629  
⑤ スペイン革命の存在の証人 文献46, pp.190-191

- ⑥ クリヴィツキーの証言 文献46, pp.53-76より
- ⑦ スペイン革命の存在の証拠に対する過去の学者の態度 文献46, pp.188-189
- ⑧⑨ なぜ、ソ連に都合の悪い事実は無視されたのか？ 文献24, pp.152-153
- ⑩ 前掲③の資料（ボロテンやオーウェルなどの革命の事実や共産党の役割を示す著作は、フランコ時代のスペインでは積極的に出版された）
- ⑪ なぜ、スペイン革命の存在はフランコにとって都合がいいのか？ 文献48, p.94などより
- ⑫ フランコにとって都合のよいことを嫌う人々 文献5, p.28より
- ⑬-1 スペイン革命史の出版 文献5, p.633
- ⑬-2 歴史の神話からの解放 文献48, pp.9-10

#### ☆第5時

- ① フランコ政権の長期化 文献51, p.14
- ② 短命なファシズム諸国
- ③ 第二次大戦におけるスペインの中立政策 文献48, p.187
- ④ スペインの参戦を望まないヒトラー 文献48, pp.199-207
- ⑤ 足手まといとしてのスペイン 文献48, p.207
- ⑥ ナチズム 文献49, pp.21-64および文献50より作成
- ⑦ なぜ、ヒトラーはフランコ体制をナチズムより弱体と考えたのか？ 文献49, pp.141-156などより作成
- ⑧ ブラジルの軍事政権 文献63, pp.371-373
- ⑨ 権威主義的体制 文献50より
- ⑩ 権威主義体制下の国民生活 文献2, pp.180-188, 文献19, 232-234より

## V. おわりに

本稿では、価値分析的思考よりも、理論的思考の方を上位に位置づけたモデル開発を試みた。これに対してはさらにその上位に価値判断的思考や意志決定（価値決定）的思考を位置づけるべきだとする主張もなされよう。しかし、筆者は冒頭に述べたように、そこからは個人の精神の自由な営為として、個々の教師と学習者に委ねられた分野であり、一般化や理論化になじまない分野であると考えている。判断や意志決定の例を個々の教師の責任において参考として語ることに許されようが、学校教育の固有の一般的責務は、よりよい判断や意志決定を保障するために、より多くの事実に基礎づけられた歴史認識育成をめざすことに限定されるべきではないか。

### 【註】

- 1) 佐々木英三, 「歴史思考力育成の原理—K.O' Reilly の場合」, 全国社会科教育学会『社会科研究』第45号, 1996年, pp.21-30など
- 2) 原田智仁『世界史教育内容開発研究』風間書房, 2000年
- 3) 溝口和宏, 「市民的資質育成のための歴史内容編成—『価値研究』としての歴史カリキュラム—」, 全国社会科教育学会『社会科研究』第53号, 2000年, pp.33-42  
桑原敏典, 「自立的な価値観の形成をめざす社会科論争問題学習—『アメリカの社会的論争問題』を事例として—」, 社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』第12号 2000年 pp.97-104など
- 4) 同様の問題意識からの論考としては拙稿「中等歴史教

育における解釈批判学習—『イギリス近現代史』を事例として—」, 日本カリキュラム学会『カリキュラム研究』第8号, 1999年, pp.131-144を参照

- 5) 森分孝治, 「社会科の本質—市民的資質教育における科学性—」, 日本社会科教育学会『社会科教育研究』No.74, 1996年, pp.69-78
- 6) 池野範男他, 「近現代史学習の授業開発の研究（Ⅳ）—社会問題史学習の小単元『男女平等を考える』—」, 広島大学教育学部・関係附属学校園共同研究体制『研究紀要』第28号, 1999年, pp.107-116
- 7) 以下の「スペイン内戦」についての論考については末尾の〔引用参考文献〕を参照されたい。特に〔48色摩〕は有益である。
- 8) ファン・リンス, 『全体主義体制と権威主義体制』法律文化社, 1995年
- 9) 中兼和津次『講座現代アジア2 近代化と構造変動』, 東京大学出版会, 1994年

### 〔引用・参考文献〕

- 1) 川成洋・渡部哲郎『新スペイン内戦史』三省堂選書, 1986年
- 2) 楠貞義他著『スペイン現代史 模索と挑戦の120年』大修館書店, 1999年
- 3) 若松隆『内戦への道』未来社, 1986年
- 4) スペイン史学会編『スペイン内戦と国際政治』彩流社, 1990年
- 5) バーネット・ボロテン『スペイン革命 全歴史』晶文社, 1991年
- 6) 斉藤孝編『スペイン内戦の研究』中央公論社, 1979年
- 7) 馬場康雄「歴史現象としてのファシズム—その定義をめぐる問題を中心に」『岩波講座 世界歴史24 解放の光と影』所収, 岩波書店, 1998年

- 8 川成洋『青春のスペイン戦争—ケンブリッジ大学の義勇兵たち』中公新書, 1985年
- 9 坂井秀夫『近代イギリス政治外交史Ⅳ』創文社, 1977年
- 10 E. H. カー『コミンテルンとスペイン内戦』岩波書店, 1985年
- 11 ジョージ・オーウェル『カタロニア讃歌』岩波文庫, 1992年
- 12 セサル・M・ロレンソ『スペイン革命におけるアナキストと権力』JCA出版, 1982年
- 13 G. プレナン『スペインの迷路』合同出版, 1967年
- 14 D. アプター J. ジョル『現代のアナキズム』河出書房新社, 1973年
- 15 H. M. エンツェンスベルガー『スペインの短い夏』晶文選書, 1973年
- 16 J. L. ソペーニャ編『スペイン人民戦線史料』法政大学出版界, 1980年
- 17 スタンリー・ペイン『スペイン革命史』平凡社, 1974年
- 18 宮崎教四郎「貨幣と階級のない社会をめざした人々—スペイン革命とアナキズム革命」『授業に役立つ世界史100話(下)』あゆみ出版, 1989年
- 19 立石博高・関哲行・中川功・中塚次郎『スペインの歴史』昭和堂, 1998年
- 20 ピエール・ヴィラルール『スペイン内戦』白水社(文庫クセジュ), 1993年
- 21 石田憲『地中海新ローマ帝国への道—ファシスト・イタリアの対外政策1935-39』東京大学出版会, 1994年
- 22 ヒュー・トマス『スペイン市民戦争』みすず書房, 1988年(新装版)
- 23 佐々木雄太『三〇年代イギリス外交戦略—国防衛と宥和の論理—』名古屋大学出版会, 1987年
- 24 清水幾太郎「スペインとインテリ」『現代思想』(著作集12)所収 講談社, 1993年
- 25 ミハイル・バクーニン『国家制度とアナキー』白水社, 1999年
- 26 橋本幸三「スペイン戦争—国際旅団義勇兵ジャック・白井」大江一道監修『パネル世界史 近現代編42』飛鳥, 1993年
- 27 若松隆『スペイン現代史』岩波新書, 1992年
- 28 A. ケストラー『スペインの遺書』新泉社, 1991年
- 29 川成洋『スペイン 未完の現代史』彩流社, 1991年
- 30 山内明編『ドキュメント現代史7 スペイン革命』平凡社, 1973年
- 31 ギブス『スペイン戦争』れんが書房新社, 1981年
- 32 ベイン『ファランヘ党—スペイン・ファシズムの歴史』れんが書房新社, 1982年
- 33 ゲラン『人民戦線』現代思想社, 1968年
- 34 ドロレス・イバルリ『スペインにおける戦争と革命1936-1939』青木書店, 1973年
- 35 樺山紘一『カタロニアへの眼』刀水書店, 1979年
- 36 五木寛之『わが心のスペイン』晶文社, 1972年
- 37 デ・フェリーチェ『ファシズム論』平凡社, 1973年
- 38 石出みどり『スペイン』岩崎書店, 1991年
- 39 ヴィラルール『スペイン史』白水社, 1992年
- 40 荒井信一『ゲルニカ物語』岩波新書, 1991年
- 41 齊藤孝『スペイン戦争』中公新書, 1966年
- 42 シプリアノ・メラ『スペイン革命の栄光と挫折』三一書房, 1982年
- 43 ボルケナウ『スペインの戦場』三一書房, 1966年
- 44 アギーレ『バスク大統領亡命記』三省堂, 1989年
- 45 池上岑夫『スペイン・ポルトガルを知る事典』平凡社, 1992年
- 46 クリヴィツキー『スターリン時代—元ソヴィエト諜報機関長の記録 第2版』みすず書房, 1987年
- 47 エリザベート・ボレッツキー『絶滅された世代』みすず書房, 1989年
- 48 色摩力夫『フランコ—現代史の迷路』中公叢書, 2000年
- 49 J. リンス『全体主義体制と権威主義体制』法律文化社, 1995年
- 50 高橋進「権威主義体制の研究—J. リンスの研究を中心として—」『思想』1977年7月号所収
- 51 碓順治『スペイン—静かなる革命—フランコから民主へ—』彩流社, 1990年
- 52 長谷川高生『独裁から民主主義へ—スペインと日本』ミネルヴァ書房, 1999年
- 53 立石博高編『スペイン・ポルトガル史』山川出版社, 2000年
- 54 フィリップ・トインビー『回想のスペイン戦争』彩流社, 1980年
- 55 坂井米夫『動乱のスペイン報告—ヴァガボンダ報告』彩光社, 1980年
- 56 トム・ウィントリングム『スペイン国際旅団—イギリス人大隊長従軍記』彩流社, 1989年
- 57 ジョン・ドス・パソス『さらばスペイン』晶文社, 1973年
- 58 イアン・ギブソン『ロルカ—スペインの死』晶文社, 1973年
- 59 マリー・ナッシュ『自由な女—スペイン革命下の女たち』彩流社, 1983年
- 60 渡辺修『オルテガ』清水書院, 1996年
- 61 若松隆「体制移行の政治過程—スペインの事例を中心に—」犬童一男他編『戦後デモクラシーの変容』所収, 岩波書店, 1991年
- 62 東京富士美術館企画構成『CAPA'S LIFE』ロバート・キャバ全作品, 1997年
- 63 増田義郎編『世界各国史26『ラテン・アメリカ史Ⅱ 南アメリカ』山川出版社, 2000年